



2021
2月

園だより

認定こども園 下関短期大学付属第二幼稚園
山口県下関市彦島塩浜町2丁目2-21 ☎ 083(266)5821

親思う心にまさる親心

お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい

ごめんなさいね おかあさん
 ごめんなさいね おかあさん
 ぼくが生まれて ごめんなさい
 ぼくを背負う かあさんの
 細いうなじに ぼくはいう
 ぼくさえ 生まれなかったら
 かあさんの しらがもなかったらうね
 大きくなった このぼくを
 背負って歩く 悲しさも
 「かたわな子だね」とふりかえる
 つめたい視線に 泣くことも
 ぼくさえ 生まれなかったら

上の詩の作者は、山田康文君。脳性マヒのため、体を自由に動かさません。言葉もしゃべれません。でも、純真な心と豊かな感性、そして、何とんでも気持ちや強い思いと粘り強さをもっていました。唯一自分の意志で動かすことができる目と舌を使って、当時の養護学校担任の向野先生とのやりとりを繰り返し、やっと完成させた詩です。

康文君のお母さんは、この詩を読んでどんな気持ちになられたことでしょうか。詩を受けて、次の日にお母さんは詩で返しました。それが右上の詩です。

お母さんの詩を読んでもらい、今度はまた、康文君がさっきの続きに取りかかりました。

母と子の絆の強さ、愛の深さに胸が熱くなると同時に、生きるということを改めて考えさせられます。そして、「ぼくが生まれてごめんなさい」などと、どの子にも絶対に言わせない社会を作っていかなければと強く思います。

康文君は、この詩を完成した2か月後に亡くなりました。15歳の誕生日の直後でした。

さて、表題は、吉田松陰が安政の大獄で処刑される前に詠んだ辞世の歌です。コロナ禍で安全が脅かされ、連日の報道により命というものに多少なりとも真剣に向き合うようになってきました。

2月3日は立春。今年の冬ほど春を待ち焦がれた年はありませんね。だから1日早くなったというわけではないでしょうが、節分では親子の原点に立ち帰って、康文君親子のように命のキャッチボールをしてみられてはどうでしょうか。暖かな春が訪れるはずです。（園長 寺本 明生）

私の息子よ ゆるしてね
 わたしのむすこよ ゆるしてね
 このかあさんを ゆるしておくれ
 お前が 脳性マヒと知ったとき
 ああごめんなさいと 泣きました
 いっぱいっばい 泣きました
 いつまでたっても 歩けない
 お前を背負って歩くとき
 肩にくいこむ重さより
 「歩きたかろうね」と 母心
 “重くはない?”と聞いている
 あなたの心が せつなくて
 わたしの息子よ ありがとう
 ありがとう 息子よ
 あなたのすがたを見守って
 お母さんは 生きていく
 悲しいまでの がんばりと
 人をいたわるほほえみの
 その笑顔で 生きている
 脳性マヒの わが息子
 そこに あなたがいるかぎり

ありがとう おかあさん
 ありがとう おかあさん
 おかあさんが いるかぎり
 ぼくは生きていくのです
 脳性マヒを 生きていく
 やさしさこそが 大切で
 悲しさこそが 美しい
 そんな 人の生き方を
 教えてくれた おかあさん
 おかあさん
 あなたがそこに いるかぎり



「お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい」 向野幾世 著